

浄土宗総合研究所報

1991

Vol.2

- 事業報告
- 法然上人の念仏



- 巻頭言……………2
- 平成2年度事業報告……………4
- 出版案内……………6
- 法然上人の念仏……………7
- 総合研究所・所員名簿……………15

所報第2号に寄せて

竹中信常



昭和十八年、当時日本は軍国主義と右翼思想の嵐のまっただ中にあり、佛教界は思想統制の圧力に押しつぶされていた。そうした中で、伝統宗学の純粋性と学問の自由とを守るために、わが宗では浄土宗教学院が昭和十八年に設立された。そして戦時下、懸命になって浄土宗信仰の灯火を守りつづけた。そして戦後、昭和二十一年十一月、混乱のさ中であつた日本の諸学会にさきかけて京都佛敎専門学校に第一回の浄土宗学大会を開催した。爾來四十五年、その名称も浄土宗学大会(昭和三十年)、浄土宗教学布敎大会(昭和五十四年)そして浄土宗総合学術大会(平成三年)と変化した。その間、わが宗門には分裂・合同の大変動があつたが、東西の学人及び有識者はいささかの動揺もなく、先人が樹立した宗学の純粋性と自由の精神を継承して来たのである。本秋、大正大学で百余人の研究発表者と特別講演及びシンポジウムが盛大に開催されたことは周知の如く

である。主催の宗門当局はもちろん、これに参加した個人及び教学院、布教師会、法式教師会、総合研究所の諸師に對して深甚の謝意を表す。

総合研究所の教学・布教・法式の各研究部が生きた一つの活動体となつて、本宗の教化を将来に向かつて推進させる責務は重大である。それにも増して大切な事は、こうした有機体の各組織が真に一体となつて総合の実を挙げることである。それには各研究員が真摯におのれの責務を完遂する以外にはない。

総合研究所は発足の日も浅く、なお且つ組織面でも足らざる所少なくないが、とりあえず現下の情勢に即応して情報の蒐集・交換・普及をはかるべく体制を整えつつある。

また研究所の合同研究課題たる『浄土教文化論』第二集・「阿弥陀仏編」の編成を明年度を期して完成させるべく実働にはいつている。宗門内外の御支援をお願いする次第である。

今回の所報に、当研究所教学研究部長の藤堂恭俊先生の講義録を掲載した。宗祖法然上人の御歌についての有意義な記録である。御一読いただきたい。

平成22年度・浄土宗総合研究所の活動

- 4月13日 第5回運営企画会議
特別研究会 講師・東京教区繁成寺
- 5月15日 東京都医師会会長 福井光寿師(布教)
- 5月23日 集中研究会(法式)
特別研究会 講師・福井光寿師
議題・「医療と宗教の問題点」
会場・総合研究所(布教)
- 5月25日 講師・福井光寿師
- 5月26日 第6回運営企画会議
新田研究員・研究部員歓迎会
- 5月26日 月例研究会 講師・福西賢兆主任
議題・「緑山流声明概説」
会場・浄土宗東京事務所会議室(法式)
- 6月13日 資料収集
於 比叡山「声明譜と日常勤行本の調査」
(法式)
- 6月14日 特別研究会 講師・東京教区貞源寺 DES主催
藤木雅清師(布教)
議題・「臓器移植と仏教の現状」
会場・総合研究所(布教)
- 7月2日 講師・穴戸栄雄主任
議題・「三盞蘭盆・施餓鬼の莊嚴と表白類の解釈」
会場・知恩院山内源光院(法式)
- 7月5日 公開講座
議題・「緑山流声明(四智讃他)」
会場・浄土宗東京事務所研修室(法式)
講師・兵庫教区如来院 久松亨道師
- 8月7～8日 伝法関係資料調査 大本山増上寺(教学)
- 8月22～23日 伝法関係研修 福井教区西福寺(教学)
- 8月27日 月例研究会 講師・津田徳翁部長
議題・「緑山流声明(四智讃他)」
会場・浄土宗東京事務所研修室(法式)
- 9月6日 公開講座 講師・兵庫教区如来院 久松亨道師
- 9月12日 集中研究会
会場 宗務庁・淀川キリスト教病院ホスピス病棟
議題・「四智讃」
会場・知恩院山内源光院(法式)
- 10月4日 月例研究会 講師・津田徳翁部長
議題・「緑山流声明(錫杖)」
会場・浄土宗東京事務所研修室(法式)
- 10月11日 広布薩研究会 京都市 法然院(法式)
- 10月18日 第7回運営企画会議
- 10月22日 集中研究会 宇治市黄檗山萬福寺「普度勝会」(法式)
- 10月28日 集中研究会「鼎談・公開研究会を振り返って」
会場・総合研究所(布教)
- 10月29日 公開研究会 講師・新山の手病院 藤井源七郎院長
大正大学 真野龍海教授
藤井正雄教授
- 11月1日 公開講座
議題・医療と宗教 パート1
会場・大本山増上寺三緑ホール(布教)
- 11月10日 集中研究会「緑山流声明と雅楽の夕べ」
| 現代音楽と声明の出会い |
会場・大本山増上寺(法式)
- 11月19日 定例研究会 講師・竹中信常所長
議題・「浄土教の未来像―阿弥陀仏・念仏往生のとらえ方」

11月19日	会場・増上寺南信徒控室(布教)	2月5日	定例研究会	講師・神奈川教区 西連寺 坂野泰巨師
11月22日	伝法関係資料収集調査 大本山増上寺(教学)		講師・「寺院の教化戦略」	
11月26日	月例研究会(法式)	2月8~9日	合同研究会	会場・浄土宗東京事務所研修室(布教)
11月28日	法然院広布薩習礼(法式)		会場・宗務庁	
	月例研究会	2月14日	月例研究会	施設見学 静岡聖隷ホスピス(布教)
	講師・東京音楽大学助手 広瀬喜行先生		講師・津田徳翁部長	
	日本作曲家協議会公会員 甲田潤先生	2月15日	第8回運営企画会議	講師・藤堂恭俊部長
	講師・「音声部の五線譜表記について」	2月15日	研修会	講師・「法然浄土教における念仏信仰の内実 ——特に自詠の和歌を中心として」
12月6日	定例研究会	2月18日	定例研究会	会場・浄土宗東京事務所会議室(法式)
	講師・長野教区教区長 袖山栄真師		講師・東京教区観智院住職	
	講師・「メディアと教化」		大正大学講師 土屋光道師	
12月10日	公開講演会			
	会場・増上寺南信徒控室(布教)			
	講師・京都大学桑山正進教授			
	講師・「ガンダーラ仏教の特質」			
12月11~12日	諮問課題研究会・大阪市立美術館・清涼寺研修(教学)			
12月13~15日	資料調査 於・山口教区大日比西田寺	2月25日	法然院広布薩習礼(法式)	会場・浄土宗東京事務所会議室(布教)
12月14日	臨終行儀資料撮影(法式)	2月27日	各宗教化関係研究所連絡協議会	会場 真言宗智山派
12月17日	法然院広布薩習礼(法式)	3月7日	公開講座	講師・宍戸栄雄主任
12月17日	定例研究発表会			講師・「天台声明を研究する人の為に」
12月17日	発表者 竹内真道研究員			会場・知恩院山内源光院(法式)
	「成唯識論」における「死」について	3月11日	他宗派研修	華嚴宗大本山東大寺「十二観音悔過参籠」(法式)
	齋藤舜健研究部員	3月25日	法然院広布薩習礼(法式)	
	「瑜伽師地論」「菩薩地」戒品所説の三聚淨戒の構造	3月27日	公開講座	講師・大正大学教授 石上善心先生
1月14日	諮問課題特別研究会(布教)			講演・「仏像の美——その語りかけるもの——」
1月17日	公開講座			会場・佛教大学四条センター(教学)
	講師・京都夷川神社 中川清 宮司			
	講師・「三尊礼と附楽」			
1月28日	法然院広布薩習礼(法式)			
	会場・宗務庁3階講堂(法式)			

*各項目末の(一)内文字は主催した研究部を表す

総合研究所編

『浄土教文化論』刊行

発行所―浄土宗出版室／浄土宗東京事務所

発売所―山喜房佛書林

B5判／上製・函入り／四〇四ページ／定価二五〇〇円(本体一四五六三円)

●本論集は昭和五十八年度より同六十年年度の三年間に互って旧組織の教学院研究所が企画した総合テーマを、浄土宗教学の第一線に活躍している諸学人の論稿によって編成したものである。これを浄土宗総合研究所平成二年度の成果として発刊するために、新に若干の補章、補筆を試み、より完備した形にして世に問うものである。

●いうまでもなく、現代浄土宗の教学、教化の責務は宗義の基礎的研究の上に立って、すべての機能を総合してゆくことによって、念仏信仰を個人、社会の現実と反映させ、現代日本の精神的・宗教的情操の高揚をはかることにある。従って、われわれは「念仏篇」につづいて、浄土教の本質的課題たる「阿弥陀仏」と「極楽浄土」の現代的意味と役割との解明につとむべく、今後さらさらこれらの課題を共同課題として順次取り上げてゆく所存である。

(竹中信常「後序」より)

- 序説 浄土教文化論の発想とその内容………竹中信常
- 第一章 念仏思想の流れ
- 第二章 念仏信仰の担手
- 第三章 念仏の文化
- 第四章 浄土教団の教義と布教
- 第五章 浄土教儀礼論
- 第六章 現代念仏論



【総合研究所の刊行物】

- 『教化研究』第一号：平成二年三月発行
集中研究会指導講義（五重相伝について）／研究部員成果報告／教学布教大会「般研究・意見発表」
- 『教化研究』第二号：平成三年三月発行
特集「医療と宗教」
- 布教資料 第四集『浄土経典に学ぶ』：平成三年三月発行
観無量壽経／般若三昧経
- 布教資料 第五集『現代の教化をもとめて』：平成三年三月発行
浄土教の未来像／仏教の二重構造／寺院の教化戦略／現代人への教化

法然浄土教における念仏信仰の内実

とくに自詠の和歌を中心として

教学研究部部長

藤堂恭俊師



宗歌「月かげ」のお歌は ●念仏信仰の中味

本日は、法然上人における念仏信仰の内実についてお話し申し上げたいと存じます。上人のみ教えは、主著の『選択集願念仏集』にまとめられてあります。しかし、『選択集』は棒をお召しになった上人から講義を拝聴するような堅苦しさがございます。それに対して和文で書かれた和語の類は、平服といいますが、膝を交えて上人のご説法を拝聴するといった気軽さがあるわけがございます。和漢

いずれの御遺文も皆、ほかの方からのお願いをお受けになって、その上でお書きになったものばかりです。

ところが、和歌は法然上人がその時々の時のお気持ちを表現されているという点で、ほかからの束縛を何らお受けにならないでお詠みになっていますから、法然上人の念仏信仰の中味を表現されていることとなります。したがって、上人の念仏信仰の中味を味わっていく上に貴重な資料といわねばなりません。そういった点で、宗歌「月かげ」のお歌をとりあげて考えてみたいと存じます。

「月かげ」の歌と申しますと、印象に

のこっていますことは、高校野球で大阪の上宮学園が試合に勝ちますと、歓声にどよめく最中に、この「月かげ」のお歌が流れる。甲子園を埋めつくした観覧席は水を打ったようにシーンと静まりかえります。私たち宗門人は公式な場では必ず最初か最後に、この宗歌を唱和いたしますね。しかしながら、「月かげ」のお歌の心、中味についての解説は、全然ないとは申しませんが、あまり多く見あたりません。

この「月かげ」のお歌は、『観無量寿経』の第九の真身観文の中の撰益の文をお詠みになったお歌であると、「四十八

卷伝』に、その題目が置かれています。「光明徧照十方世界・念仏衆生摂取不捨」という摂益の御文を、月の光になぞらえてお詠みになった和歌なのです。

「光明徧照」の御文は

● 仏凡相互の呼応を

私は摂益の御文を前と後の二段に分けて考えたい。「光明徧照十方世界」という御文をどういう立場から仏邊に立つお歌であるといえるかということ、「念仏衆生摂取不捨」という御文はどういう点から機邊に立つお歌であるといえるか。そういうことを考えてみたいと思います。まず「光明徧照」は、機邊に立つのではなく、仏邊に立っている。月の光がこうこうと照り渡っているという、この事実をどのように受けとめるか。

月の光がこうこうと照っていても、それを感じる人もありますし、感じない人もあります。満月の夜に、雨戸を閉ざしている。そのように月光に対するとりくみは万人万様であります。

しかし、月を見ようとする人も、全然関心がない人も、みんな月の光の外に一步も出ることができないんです。まず「我が名をとなえよ」という阿弥陀様の第十八の願から申しまして、仏様からの呼びかけは、誰彼の区別なく、一律平等にすべての人に向かっているわけでしょう。まず、「我が名をとなえよ」という、

仏様からの呼びかけを我々が頂戴する。その呼びかけに応えて、阿弥陀様の御名を呼び奉る。また心の中は「どうぞ、この私をお救い下さい」と、仏様に呼びかけますと、その呼びかけに応えて仏様が救いの手をさしのべて下さる。そういう宗教的人格的な呼応の関係がある。こういう観点から「月かげ」のお歌を見ていきたい。

まず、「月かげのいたらぬ里はない」ということは、「光明徧照十方世界」ということですね。阿弥陀様を信じよう、信じまいと、あるいは無関心であろうと、念仏の信仰に反発を持ってしようと、ともかくにも、すべての人はこの阿弥陀様の光明の中に包まれ、阿弥陀様の本願のみ心の外には一步も出ることができないのであります。

そうしますと、念仏する人も、念仏しない人も、みんな、阿弥陀様の光明の中でともに生かされながら生活している同胞じやないかという意識が芽生えてくる。そういうことが、まず教化者としての出発点ではなからうか。ともかく、みんな阿弥陀様の本願のみ心の真つただ中にあるのだということは、阿弥陀様の本願、平等の大慈悲心を前提としてのことです。つまり、この「月かげ」のお歌の前半の句は仏邊に立っている、と受けとるべきであります。

阿弥陀様に直接かわらうとする人、かわりを持ちたくない人、そして無関

心な人、抵抗する人と、いろいろな種々雑多な人が、その光明の中に包まれている。阿弥陀様はそれらのすべての人をわけへだてなく、一律平等に「わが名をとなえよ」と常に呼びかけられているのであります。

気づかしめ、

温もりの中に包みこむ

● 包み生かす光明

法然上人は、この光明のことにつきまして、詳しく説明しておられます。それによると、阿弥陀様の光明には常光と神通光とがある。常光とは「常時、不斷に照らす光である」。これに対して神通光は「これ別の時に照らす光なり」と申されています。

常光というのは、頭光とか、身光とか、項光とか、いろいろな表現がありますが、いずれにしても、常の光明でありまして、照らさざるところがない。いつでも、どこでも行き渡らないところはない。太陽の光のように、あらゆる人を一律平等に照らし出しておる。

これは、ただ光明が照らしているというだけでいい。光明に照らし出されることによって、自分の赤裸々なすがたに気づかされる。今まで気づかなかつた世界に自分自身がいることに気づかさず、知らされるのであります。

光明によって自分の影、自分の内的な

闇にも気づかされる。自分の影を見ながら、なかなか、影について考えようとしない。影をとらえようとしない、そういう自分自身を、光明によって知らしめ、気づかしのめるといふ働きが常光の中にある。

太陽の光も影を映し出してくれますが、そのほかに、熱をもって、我々に暖かさ、温もりを与えてくれる。そして、あらゆる万物を生成していく働きがある。

ちょうどそのように、ただ影だけを知らしめるのが阿弥陀様の光明ではない。阿弥陀様の光明に照らし出されるものは、みんな阿弥陀様の温かいふところの中で温もりを感じさせて下さるのです。また、感じる感じないとかかわらず、そういう温もりの中に、われわれを包みこんで下さっているのですから、われわれは、阿弥陀様に生かされて、生きていることになりました。それは阿弥陀様の光明の真つただ中に包まれているから、そういうことが言い得るわけなんです。自分自身が育てられながら、生かされて生きているということは、やはり光明、本願の平等大慈悲心の働きを頂いていることでもあります。

神通光は念仏する人にかかわる光明

では、常光と神通光とはどういう関係

にあるか。「常時、不断に照らす光明」である常光に対して、神通光は「別の時に照らす光明」であり、念仏の衆生だけを照らす光明である。

そうしますと、阿弥陀様は身勝手な方だな。念仏する人にだけかかわって、念仏しない人をほっとくのか、と考える方もおいてなるでしょうね。いってみれば、「縁なき衆生は助かりませんのか」というようなことですね。

しかしねえ、神通光も常光も結局、別別の光明でなく、阿弥陀様の本願から出ている光明ですから、一つの光明なのです。説明の都合上、そういうふうに分けてあるだけです。

第十二の願は「光明無量」の願がある。阿弥陀様は既に、この願を成就されていますから、その願に表現されていることが現在ただいま働いているわけです。

光明はいろいろな人を照らしている。その光明に気がついた者と気づかない者がある。光明は闇とか、影の存在を知らしめているわけですが、その知らしめられた影なり、闇なりを気づかないか、気づくかによって、常光と神通光の違いが出てくるのであります。

阿弥陀様の光明は、ここまでが常光で、これから先が神通光というように分けることができる。光明はいつでも、どこでも、誰に対しても一律平等に照らしているけれど、それに気づかない人もあるわけですが、月の光を浴びながら、それ

をながめようとする人だけが光明に触れ、本願の平等慈悲の働き、つまり神通光を頂くのであります。したがって、神通光は撰益の御文の後半「念仏衆生撰取不捨」、「月かげ」のお歌の「ながむる人のころにぞすむ」という後半の句にかかわる光明であります。つまり、後半の句は、機縁に立って理解すべきであります。

光明と念仏

●信機と信法

そうしますと、光明はお念仏とどうかわるのかということについて、法然上人の『三部経釈』を拝読しますと、「十方世界にあまねく光明を照らして、一切の衆生にことごとく縁を結ばんがために、光明無量の願を立てたまえり」とあります。これは第十二の願であります。これなんです。まず一切衆生に縁を結ぶ。そうして第十八の願によるお念仏、「わが名をととなえよ」と呼びかけられる。つまり光明撰取の縁とお念仏がかみあって、往生浄土の素懐をとげさせていただくのであります。

光明によって、自分自身は生死の世界に罪を造りながら生きている煩惱具足の凡夫であるということに気づかされるわけですが、それにはやはり、この光明の波長に合うような行動をしませんと、気づくことができない。それには、

なんといつても「わが名をととなえよ」と呼びかけられたお念仏することです。南無阿弥陀仏と御名をとなえる波長と光明の波長と相合うことよって、はじめて赤裸々な自分自身に気づかされるのです。

この空間には、目には見えませんが、テレビとか、あるいはラジオとかの電波が通っていますが、それを受けとる機械がございませんと、聞いたり、見たたりすることができないのと同じなのです。

そのお念仏は阿弥陀様から呼びかけられた、その阿弥陀様の名号を声を出しておとなえをする。そのことよって、今度は自分自身のありのままの姿に気づかされる。それが、煩惱具足の凡夫という自覚です。

お念仏して光明を頂きますと、今まで気づかなかった自分の影も、汚れもあらわに浮き彫りされますから、それに気づかされるわけでありませう。これを「信機」といっているのです。

凡夫の自覚

●三学非器と煩惱具足の凡夫

法然上人のご自覚には、「三学非器」の自覚と「煩惱具足の凡夫」という自覚（信機）の二種があります。どうも「信機」と「三学非器」をごっちゃになさるきらいがまま見受けられますが、これらは性格が異なっていますから、判然と区別しなければなりません。

歴史的に申しますと、「三学非器」は開宗以前におけるご自覚。「信機」は開宗後のご自覚です。つまり宗祖上人が阿弥陀様の信仰をお持ちになつてゐるか、いないかの相違なんです。

「三学非器」の三学とは戒定慧でありませう。これは聖道門における仏道の実践の基本でございますから、それを法然上人は実践された。自らの力よって大いに努力、精進をし、仏道を歩まれた。その中において、自分は戒も定も慧も満足に達成することが不可能だ、そういう自分であるという点にお気づきになつた。これが「三学非器」なのです。

この三学という場合には、努力を重ねていけば、自分の力よって仏に成れるという前提があります。ところが、「信機」は、光明よって赤裸々な、ありのままの自分自身に気づかされるわけですから、光明と私の間には越えがたい溝・断絶がある。断絶があればこそ、光明に照らしだされるわけなのです。

基本的にいうと、この二つの自覚は成立する基盤を全然異にしています。しかし、「三学非器」のご自覚に立たれたからこそ、法然上人は阿弥陀様による救済の道へお移りになれた。そういう点では関係がございますけれども、「三学非器」そのものと、「煩惱具足の凡夫」という自覚とは、おのずから成立の基盤を異にするということをはつきりしておかなければなりません。

貪・瞋・癡は人間の性

「貪・瞋・癡」という三毒、煩惱…、字のように煩らい悩むということですが、私はこの煩惱を人間の性と言つた方が一般の人にわかりやすいのじやないかと思つてゐます。男であろうと、女であろうと、勉強ができて、できなくても、年齢のいかんを問わず、煩惱は生まれながら人間として、みな、一律平等に具えている、よくない心の働きなのです。

たとえば「貪」、「貪欲」は飽くことを知らないむさぼりのことです。財欲、淫欲に対するむさぼりは足ることを知らないから、欲に溺れてとりかえしのつかない羽目におち入つてしまひます。

「瞋」、「瞋恚」は怒り、腹立ちの心ですが、自分の思いどおりにならない時に必ずこの心が起ります。つまり、カーッとすることです。腹が立つてカーッとしますと、善悪の判断をする理性が崩壊してしまふ。そうして、殴る、蹴る、物を投げつけたりして、当たりどころが悪いと相手が死んでしまふ。感情が興奮しますと洪水のごとく、堤防の役目を果たすべき理性を決壊させてしまふわけのです。

「癡」、「愚癡」にしても、そうです。物の道理は頭でわかっているんですが、しかし、からだ全体をおして本当にわかつてないのです。いつかは死ななきや

ならんとわかっていても、それを棚上げして、人が死ぬのを見ても、私はめつたに死なないと思っただけです。

愚癡っていうのは、それですよ。頭が悪いから物の道理がわからないんじゃない。わかっていながら、からだの感情がそれについていけないのです。だから、本当にはわかってないのです。道理を踏みはずして、躓いたり、転んだりすることになるのです。

私たちは生きてある間、この「貪・瞋・癡」という人間の性に振り回されてるわけです。つまり、煩惱が私の主人公になつてゐるわけです。阿弥陀様の光明に照らされされると、そういうことに気づかされる。気づかされて、このどうしようもない私を、何とかお救い下さいと、阿弥陀様におすがりすることになります。お念仏をとおして赤裸々な自分自身に気づかされて、自分は「煩惱具足の凡夫である」という自覚をもつわけであります。

信仰の深まり

●感応道交

そうしますと、現在ただ今の自分のありのままの姿をしかと知らしめられることによつて、今度は阿弥陀様という信仰の対象、救い主、阿弥陀はとけの方に方向を転換して、「どうぞ、この私をお救い下さい」というおもいを、声に托して、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称名念仏

をいたします。このようにお念仏を基盤とし、その上に「信機」と「信法」が成り立ちます。

「信機」が先か、「信法」が先かというような議論もありましようけれども、この両者は螺旋状になって、だんだん深まっていくのです。信仰における二面性、あるいは二重性と申しますか、異つた方向をもつ「信機」と「信法」が互いに関係をしあいながら、信仰の心を盛り上げ、昂め、仏凡の関わりが漸次深まっていくのです。

その仏凡の関わりがずうつと継続し深まると、今度は、いわゆる親縁という宗教的な感応道交を経験することになります。

この私が阿弥陀様に向かって礼拝をする。御名号をおとなえする。そして、「どうか、この私をお救い下さい」と念じる。その姿、思いを阿弥陀様は見、聞き、知り給うて、しかも、念仏する私を阿弥陀様がちゃんと念じて下さる。この仏凡の関係、阿弥陀様と私とは切っても切れない関係について法然上人は、「阿弥陀仏の三業と、行者の三業と、彼此一つになりて、仏も衆生もおや子のごとくなる」と申されているのであります。この仏凡間の関わりを「親縁」と申しています。このような仏凡間の関わりを感じた念仏者の日常生活は、まことに尊いばかりでなく、「真の仏弟子」として日日好日のさわやかな心持ちと、阿弥陀様の光明裡に生

かされて生きている有難さ、生死に煩わない無量寿を生き抜く力が湧いてまいります。

終いの時を迎える

●身体的・精神的苦悩

それでも人は、生まれたからには臨終の夕べを迎えねばなりません。終いの時を迎えますと、頭が痛い、胸が苦しいという病気という身体的な苦痛と、さらにそれとは別に、精神的なさいなみを受けねばなりません。身体的な苦痛に加えて精神的なさいなみが、とつかえひつかえ襲ってくる。

その時に、平生お念仏申している人に向つて阿弥陀様は、大光明を放ちながら来迎して下さるのです。臨終の念仏者は、いまだかつて感じたことがない神々しさに心を集中しますから、身体的な苦痛も、精神的なさいなみも忘れてしまつて、正念に住することができるようになります。

いかにしてこころは 正念に至るか

こころが少し、善導様と法然上人の違ふところなのです。善導様は、「願わくは弟子等、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず。身心にもろもろの苦痛なく身心快樂にして禅

心の主人公を入れ替える

定に入るが如く聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ」と申されていますように、まず自分が正念に住さなければ、ご来迎を感じ取ることができないとお示し下さっています。しかるに法然上人の場合は、来迎を頂くことよって正念に住することができるとお示し下さっています。

臨終は、身体的な苦痛だけじゃない。精神的なさいなみがとつかえひつかえやつてくる。いくら平生念仏していても、そういうことにおかまいなく、身体的苦痛と境界愛、自体愛、当生愛といった精神的な苦悩がどんどん押し寄せてきますから、心は顛倒、錯乱、失念とゆれにゆれ続きますので、臨終間際に「正念に住する」ことはできない。法然上人は、正念によるが故に来迎を頂くというのを極力否定されたわけです。逆に来迎を頂きますから、容易に正念に住することができますと申されているのであります。

阿弥陀様は私が気づかない遙か以前から、ずっと「わが名をとなえよ」と、私たちに呼びかけ、「名をとなえよ」ように念じ下さっている。阿弥陀様は、成仏されてから今日まで、光明を連続して照らしどおしにお照らし下さっています。それにやっとなげいて、そしてお念仏を申して、最後に来迎を頂戴する。そういうことになります。

「信機」から「信法」へ、「信法」から「信機」へと仏凡の関わりを深めていくわけですが、その間に「懺悔」ということも出てきます。

何か悪いことをして、それを「懺悔」するだけじゃありません。自分はまともな人間だと思っていたけれども、阿弥陀様の光明に照らし出されると、「貪・瞋・癡」に振り回され、煩惱の命ずるままに行動しておった。そういう自分を「懺悔」するので。この「懺悔」とおして煩惱を、自分の主人公の座から引きずり降ろすのです。

そうすると今度は、「勧請」ということになりますね。煩惱を主人公の座から引きずり降ろしましたから、今度は阿弥陀様を心の主人公としてお迎えするので。たとえば、観音様のお像を拝見しますと、必ずおつむの宝冠の中央正面に化仏——阿弥陀様を頂戴なさっている。そういうことよって、阿弥陀様を自分の心の主人公としてお迎えする。これを「勧請」と申します。

法然上人は『七カ条の起請文』のなかで、「貪・瞋・癡起こらば、なお悪趣へ行くべき悪いの起こりたるぞと心得て、これをとどむべきなり。しかれども、いまだ煩惱具足の我らなれば、かく心得たれ

ども、常に煩惱は起るなり。起れども、煩惱をば心の客とし、念仏をば心の主としつれば、あながちに往生をさえぬなり。煩惱を心の主として、念仏を心の客とすることは、雑毒、虚仮の善にて往生は嫌わるるなり」と申されています。

その仰せのように、煩惱の働き、これを客としなきゃいかん。そのためにはどうしても、心の主人公に阿弥陀様をお迎えしなければなりません。お念仏の内には「懺悔」し、「勧請」するというのは、そういう心の入れ替えをするのですね。

お念仏の相続とは

こういうように法然上人のみ教えを頂きますと、念仏の行者が撰取されていくというのは、終の時を境に極楽往生をすることだけじゃない。お念仏を申すその人が、生きている間に、お念仏する以前の自分とお念仏するようになった以後の自分とがどのように改まるのか。「ありがたい」「生かされている」と言葉では申しませんが、その言葉の中身についてはなかなか説いてくれませんね。やはり信仰の世界は、それぞれ各人が冷暖自知するところにあるのです。

そこに、お念仏を相続することの大切さが出てくる。

一遍念仏申したら助かるとも言いますね。一声で助かるのなら、それ以上に多

くおとなえしなくてよいではないか。こういう数量的な判断をする方が大変多いようです。おもしろいことに、お小遣いの方は少しでも多い方を喜ぶのですが、お念仏に限っては多いよりも少ない方が喜ばれる。同じく数量的判断ですが、この違いはどこで、どのように転換するのでしょうか。まことに摩訶不思議な判断と思われてなりません。

しかし、法然上人は「上尽一形、下至十声一声等」と書いておられるんです。

俗に、おいしいご馳走なら「一遍食べたら死んでも本望だ」と申しますね。けれど、何遍でも食べたくないんですか。それなのに念仏申すのは少し悪い。これは理屈に合いませんね。つまり食べず嫌いの傾向が強くて出ているように思われます。お念仏の有難さがわかれば、申さずには、となえずにはいられないのが念仏者ではないでしょうか。

そこで、お念仏を相続するとは、どういうことなのか。これは前念と後念の関係です。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声を出しておとなえをする。「どうぞ、この私をお助け下さい」「お救い下さい」という阿弥陀様に向っての思いが、次の心を受けつがれていく。それがまた前念になって、さらに後の心を受けとめられていくわけです。煩惱具足の私でございませけれども、この私が、阿弥陀様を念じ、阿弥陀様にお救い下さいと呼びかけます。その一声一声に托された阿弥陀様に

向ってのおもい、心がずうつと連続的に積み重ねられて、往生の主体が漸次内容づけられていくわけです。

まず念仏申せ

ある人がねえ、「私は念仏なんて申したくない。申したくなったら申す」と断言しました。お念仏が申したくなるまで待つのですか。

『選択集』の開巻劈頭、題名に続く次の行に「南無阿弥陀仏」という六字のお名号が記されてありますが、その割註として、「往生之業念仏為先」と書いてあります。念仏をもつて先とする。まず念仏を申す。申したくても、申す気がなくても、とにかく声に出して念仏を申しなさい。お念仏することが念仏の心を形成していくことになるんだと。

前念と後念とが関係をしいながら、阿弥陀様に向っての思いが次から次へと送られて継続し、やがて決定往生の心を定着させるわけでありませぬ。

心の中に仏思いの心があつて「南無阿弥陀仏」と申すのは、これはごく自然ななりゆきですけれども、そういう心になるまで待つてはいられないのです。だから、まず申しなさい。仏思いの心がなくても、まず声を出して申しなさい。その内に、漸次中味が実のり、熟してくるのです。

「南無阿弥陀仏」のお名号は単なる符号じゃない。阿弥陀様の内証と外用との双方の功德がお名号自身の中におさまっている。そのお名号を、われわれは帰命、発願廻向という「南無」の心をもって阿弥陀様を「南無阿弥陀仏」とお呼び申しあげる。

そうしますと、一声一声に、名によって表される阿弥陀様ご自身が、称名する人の心の中にお宿り下さるのです。阿弥陀様ご自身が、わが名を呼ぶ人の心の中にお宿り下さるということは、言いかえて申しますと、阿弥陀仏を心に刻みつけていくこととあります。それが相続ということの中味で、阿弥陀様に向つて「どうぞ、この私をお助け下さい、お救い下さい」のおもいが、決定往生の心をだんだん形成していくのです。法然上人は阿弥陀様の光明が人格を形成していくということを見抜かれていられるわけです。

教化者は 念仏と宗学をする

さあここで、教化者自身が一体どうあるべきかということを考えねばなりません。

ただ念仏申せばいいと言っても、念仏を申したらどうなるんだと聞かれたら、わしはまだ死んでお浄土というところに

行ったことがないからわかりませんが、これじゃあ、だれもお念仏にはついて入ってきませんわね。自分にはそういう体験がないにしても、浄土宗の念仏の信仰の中身をも少し具体的、体系的に紹介をして、お念仏する人の糧になるように勧めることを忘れてはいないでしょうか。

浄土宗学というと、極楽とか、本願とか、あるいは安心とか、起行とか、念仏とかという名目、いわゆる概念について勉強をすることぐらいに思っている方が多いんですけども、これは初歩の段階で、それが出発点にならないといけませんね。

私は宗学について、宗義・宗乗・宗学の三つに分けて考えています。

宗義というのは、浄土宗をお聞き下さった法然上人のご遺文に書かれてある内容。つまり往生浄土の道理であります。

この宗義を、そのまま素直に実践するのが宗乗であります。ところが、時代が変われば人間の考え方も変わってくる。社会でも、昔はなかった問題が続出してくる。まあ、昔の人は、おじいさんもおばあさんも、「死んだら浄土にお参りができる」と、安心して死んでいかれた。いわゆる「愚鈍念仏第一の機」になることができた人が多かった。今はなかなか、そうはまいませんわね。

そういうような、いろんな諸問題がある。しかし、そうだからといって、宗義を変えるわけにはまいません。そうい

う変化のただ中であって、往生浄土の道を一体どのように体系づけていくか。二祖上人は二祖上人で、法然上人のみ教えをそのまま頂戴され、背師自立の説が横行する中であって、宗祖上人のお念仏を組織体系化しつつ、お念仏をひろめられた。その二祖上人のように祖述と顕彰をしなければなりません。つまり、現代における宗学を構築する必要があるわけです。宗義を土台にした現代の宗学が当然あつてしかるべきです。

そういうように、宗義・宗乗・宗学というように一応の概念規定を行った上で、宗学をするということ、浄土宗のお坊さんたちにしていただきたいのです。宗学をするからには、しっかりとお念仏を申しながら、昨今の社会、人の苦悩を感じ取り、その苦悩をいかに解決するかを、課題としてもつていただかなければなりません。

その基本となる宗義に示されている、死んでから先の往生であることを、私は否定はいたしません。人間は過去を背負いながら、未来を内に孕みつつ今を生きているのです。未来に夢がなければ、前進することができません。死んだら何にもなくなるんじゃないかと、必ず阿弥陀様のおふところに帰らせて頂くという大きな目標、これは消すことはできません。お念仏を申すことによつて死後に往生させて頂く自分が、現在ただいま、お念仏することによつてどのように改まること

できるのかを、はつきりさせる必要が大いにあります。ただ、「ありがたい、ありがたい」と口では言うけれど、一休どうありがたいのか。何がありがたいのか、その中身を開陳せねばならないと思います。

心に阿弥陀様を

そういうようなわけで「月かげ」のお歌をよく味わいますと、その中に浄土の宗義概要が全部入ってしまうわけです。

歌の末尾の「ながむる人の心にぞすむ」という「すむ」は平仮名で書いてございますので、「澄む」と「住む」のどちらだとよく聞かれるんですけども、眺むる人の心に一体何がすむのかと考えたならば、おのずからわかりますね。観音様がおつむに阿弥陀様を頂戴されておるように、われわれの心に阿弥陀様をお迎えして、私の心に住まわって頂かなければなりません。

どうか皆さん。お互いに煩惱具足の私でありませうけれど、切磋琢磨しあってお念仏を申し、それぞれの心の中に阿弥陀様をお迎えし、こちらの主人公と仰ぎながら、教化の第一線に立てるようになりたいと存じます。長時間のご静聴ありがとうございました。

所長	竹中 信常 〒141	東京都品川区上大崎1-9-24	隆崇院	03-3441-8385
事務局				
事務長	佐藤 行信 〒248	神奈川県鎌倉市長谷4-2-28	高德院	0467-22-0703
書記	市川 隆士 〒144	東京都大田区東桃谷3-1-6		03-3742-3487
	久保田智雄 〒170	東京都豊島区西果鶴4-8-40	盛雲寺	03-3918-1271
総研担当	大辻 隆善 〒186	東京都国立市東2-19-53 青松荘10		0425-76-6274
教学研究部				
部長	藤堂 恭俊 〒605	京都市東山区林下町411	信重院	075-541-3933
主任	阿川 文正 〒107	東京都港区赤坂4-3-5	浄土寺	03-3583-3630
	香川 孝雄 〒543	大阪市天王寺区城南寺町5-16	蓮生寺	06-761-0710
研究員	小林 尚英 〒287	千葉県佐原市佐原イ-1057	法界寺	0478-52-2855
	小野田俊藏 〒653	神戸市長田区宮川町2-1	光堂寺	078-691-1893
	久米原恒久 〒350	埼玉県川越市連雀町7-1	蓮馨寺	0492-22-0043
	竹内 真道 〒522	滋賀県彦根市本町2-3-7	宗安寺	0749-22-0801
研究部員	渡辺 真宏 〒166	東京都杉並区梅里1-4-56	西方寺	03-3311-6704
	長谷雄文彰 〒153	東京都目黒区中目黒5-24-53	祐天寺	03-3712-0819
	平岡 聡 〒616	京都市右京区嵯峨野清水町3グランドハイツ嵯峨野207		075-864-4932
	齋藤 舜健 〒692	兵庫県朝来郡和田山町竹田995-1	法樹寺	0796-74-2448
	善 裕昭 〒847	島根県安来市安来町1927	西方寺	08542-2-3572
		佐賀県唐津市東唐津2-8-23	安養寺	0955-72-5327
布教研究部				
部長	板垣 隆寛 〒995	山形県村山市橋岡晦日町4-41	得性寺	0237-53-2962
主任	宮林 昭彦 〒232	横浜市南区三春台139	大光院	045-241-7676
	三枝樹隆善 〒660	兵庫県尼崎市寺町6	甘露寺	06-411-3562
研究員	鷺見 定信 〒253	茅ヶ崎市下町屋2-14-15	梅雲寺	0467-82-6060
	岸 一英 〒546	大阪市東住吉区杭全8-7-8	明法寺	06-719-6617
	小林 正道 〒105	東京都港区芝公園4-9-8	妙道院	03-3578-8001
研究部員	佐藤 雅彦 〒113	東京都文京区向丘2-17-4	浄心寺	03-3821-0951
	大室 照道 〒141	東京都品川区上大崎1-5-10	光取寺	03-3441-8384
	長谷川岱潤 〒141	東京都品川区上大崎1-9-11	戒法寺	03-3441-8971
	袖山 栄輝 〒380	長野県長野市西後町1568	十念寺	0262-33-2449
	安井 隆同 〒603	京都市北区紫野西蓮台町71-7 紫野スカイハイツ	西念寺	075-493-4399
	岸村 定浩 〒532	大阪市淀川区十三東1-13-16		06-304-3655
	水谷 浩志 〒471	愛知県豊田市土橋町8-6	法雲寺	0565-28-3965
法式研究部				
部長	津田 徳翁 〒108	東京都港区高輪2-14-25	正覚寺	03-3443-0071
主任	穴戸 栄雄 〒602	京都市上京区智恵光院通廬山寺上ル	真教寺	075-451-5001
	福西 賢兆 〒105	東京都港区虎の門3-11-7	栄立院	03-3431-0257
研究員	熊井 康雄 〒135	東京都江東区三好2-7-5	龍光院	03-3642-3437
	田丸 嶺弘 〒120	東京都足立区千住4-2-2 ダイアパレス千寿705	正安寺	03-3888-7214
	南 忠信 〒606	京都市左京区仁王門通大路西入北門前町471	大光寺	075-771-1635
研究部員	清水 秀浩 〒616	京都市右京区嵯峨島居本化野17	念仏寺	075-861-2221
	小島 伸方 〒250	小田原市本町3-13-53	無量寺	0465-23-1131
	中村 孝之 〒108	東京都港区三田4-7-20	大信寺	03-3441-0664
	渡辺 俊雄 〒158	東京都世田谷区瀬田1-12-23	行善寺	03-3700-3007
	小川 貫良 〒661	兵庫県尼崎市尾浜町1-21-1	光明寺	06-429-8458
	森田 孝隆 〒630	奈良県奈良市十輪院畑町12	興善寺	0742-23-7007
	八尾 敬俊 〒600	京都市下京区佛光寺通河原町西入富永町343-3	普恩院	075-351-3888

植物が芽を出し、
 葉をしげらせるのは、
 あたりまえの現象です。
 しかし、このことに生命の誕生、
 生命を伝えていくくみの謎が、
 ひそんでいるのだそうです。
 そして、その謎はおそらく、
 永遠の謎でありつづけるでしょう。
 むしろ必要なのは、
 そこに大いなる力のはたらきを
 観ることではないでしょうか。
 (撮影/菊池東太)

